

## 全能なる神(3)

— 伝統的な神学に見られる六つの誤謬 —

(チャールズ・ハーツホーン)

大塚 稔

### Omnipotence and Other theological Mistakes

Charles Hartshorne

Minoru OTUKA

#### 解題

前稿に引き続き、「不死性の二つの意味」以下、第一章の最後までを訳出した。今回訳出した部分には、ハーツホーン神学の要点が平易な言葉で集約されている。

死後にも人間は、ある超自然的な領域で、永遠にその生を歩み続けられるのか。あるいは死ぬば、単にその生が終わるだけでなく、喜びや悲しみをともなった全生涯が、現実の美や豊かさの全てが、まるで存在しなかったかのように、全くの無に帰するのか。このような極端論には、矛盾はないか。また理解を共にする苦悩の同伴者としての神とは、どのような神なのか。我々の感じを知るだけでなく、我々の感じを感じ、我々の喜びや悲しみに応える神とは、どのような神なのか。

不死性を求める者は、無意識のうちに、完全な退屈か、神になることかのいずれかを望んでいると言う。永遠に本来の自分であり続けることを望んで、死後にも更に何がしかの経験になそうとすることは、耐えることのできない単調さを求めること、つまり同じ個性をもった人生の果てしない反復を求めること、あるいは神にのみ認められるような特権を、つまりいかなる変化や新しさのなかにあっても、常に自己同一的でありうることを求めるに等しい。

確かに、現実化されないでいる生の可能性は死によって無にされる。その意味では、生の途上で死に絶えることは、悲劇である。しかし、現在の経験のみを实在とし、過去の経験を非实在と考えるなら、死によって奪われるのは、死のごく間際の一瞬の生に限られるであろう。またたとえその生が奪われても、死後に無限な生があるとすれば、その死に何の意味があるというのか。不滅なのは、死後の生ではなく、我々が現に達成してきた過去である。死によってもこの過去は破壊されることはない。今現に存在しているものだけが、实在のもので、既に存在したものには、实在を認めないというのは事実誤認である。逆に現に今存在しているものとは、光や音の例でも

分かるように、我々の与件にはならないものなのである。現実的なのは過去だけだと言ってもよい。我々が現に歩んだ過去の生涯が、神のうちに永遠に所有される。つまり人間の全生涯は、その具体的な価値の全てとともに、その人間の内面の生が持つ情念の秘密と隠された美を含む神によって、永遠に所有されるのである。

超えられもせず、不変的でもある神の完全性はある。しかしその完全性は、ただ神性を抽象的な観点から見た場合であって、具体的な観点からみた場合には、それは、自分自身は超えられるが、他のものによっては超えられず、しかも良い方向にのみ変化しうるものである。

世界を創造し、支配するある高級な、ないしは至高な、考えられるかぎりの力は存在する。ただしそれには、意志決定を占有するというような不合理性はあってはならない。むしろそれは、個体自らが意志決定権をもって、自身を創造し、支配する力、つまり最も高級な力によっては確定されずに残されるような細部を、決定するある種の能力を許す力でなければならない。

誤りや無知を免れているような、考えられるかぎりでの最も高級な、ないしは神的な、知識は存在する。ただし時間のうちにある出来事は、一度きりで完全に定められるような全体を形成することはない。それは、徐々に現実存在を増し加えながら成長し行くものである。神は、我々が明日することを、先取りして、ないし永遠において、知るようなことはない。なぜなら、我々が決定するまでは、我々の明日の決定など存在しようがないからである。

神は、無比な充満さで、他の全てのものの感じを感取するという意味では、愛に満ちたものである。しかし神は、全く確固として、恒常的に、全てのものに神的な配慮をされるが、常に一部では、新たな経験をもって、被造物の新しさに応答されるとする。

古典的有神論によれば、人間は、ただ受動的、依存的、相対的、有限的で、神は、愛に満ちたものであると言われながら、他のものに対するいかなる情緒、感情、感受性はなく、全く能動的、独立的、絶対的、無限的であるとされてきた。

ハーツホーンの神学は、このような一面的な神概念の吟味を通じて、真に合理的に知解可能な神概念の探究を目指したものである。「我々は全てを包み込む生命のなかにある一定の量子にすぎない」。先の下線部には、その結論が示されている。

## 第一章

### 共通して認められる神に関する六つの誤謬（続）

「不死性」の二つの意味。我々が自由に考えられる動物であるということから生じる一つの報いは、我々人間には死が免れないこととして意識されているという点にある。おそらく他の動物には、自分達が死ぬ定めにあることが意識されてはいないであろう。もし「終りよければ万事よし」というのがまともな原理であるとすれば、人間の生が死に帰すること、しかも死んでいるという状態は、万事よしということからほど遠いように見えること、このような明らかな事実を一体どのように考えればよいのか。このような難問に遭遇して、人間はこれまで、いたるところで、死んでいるという状態がどんなものなのかについて、ありそうもない話をし持ち続けてきたのである。このような飛躍からほぼ自由になれたのは、すなわち人間を制約するものは何かということ

から、—これは実際我々にはよく知られたことなのだが—自由になれたのは、若干の古代ユダヤ人と古代ギリシャ人だけであった。あの崇高なヨブ記には、人間の運命が、極めて深くかつ気高く考えられている。そこには、肉体の死後の存続については一切述べられてはいない。ヨブは、神を崇拜してはいるが、それは、神が、彼にあの世での至福を認めるからではなく、ただ神が崇拜するにたるものだからである。なぜなら崇拜するとは、宇宙の至高な、創造的受容的精神に対するそれ相当の応答に他ならないからである。ダンテの力強い美しい詩には—それが素晴らしい文学であるにしても、果たして正当な神学と言えるだろうか—かなり異なった態度が見られる。

例のように、この問題の述べ方にも曖昧さが認められる。生が「死に帰する」ということには、一つ以上の意味が考えられる。もし「帰する」ということが、「以外のなにものもでもなくなる」という意味だとすれば、それは不合理なことであろう。生命という意識はある状態が、意識のない死んだ状態になることなどできはしないからである。意識は意識、無意識は無意識であって意識が無意識になることはない。我々が人の伝記を書く場合、死体や塵芥を描こうとしているわけではない。死体には認めることのできない経験の流れや身体活動を描こうとしているのである。我々は単なる無を描こうとしているのか。つまり我々が特定の故人の生について述べることは正しいのか。もし正しいすれば、その何が一体正しいのか。ともかくも過去とは一体何なのか。大方の哲学者が、これまでこの問題を扱ってこなかったのは、ほとんど信じられないほどである。かりに昨日や、去年や、あるいは前世紀のそれぞれの出来事が、現在では全く非実在的なことだとすれば、歴史とは何なのか。今こそ我々は、過去についてありのままに語ろうとすべきであろう。うまくすれば、過去には、我々の主張を事実にする何かがあるにちがいないからである。

私は、かなり幸せな少年時代を過ごした。その少年時代の幸せは、一体どこにあるのか、またそれは一体何なのか。現在ではもうその記憶はかなりかすかにしか残ってはいない。記憶によって、私が、いくらかの不幸はもちろん、数々の幸せな時を過ごせたことが事実にはされないのは、確かである。私が少年時代を過ごした町に行ったにしても、そこには最早その幸せな時は見出せないであろう。しかしそれでも、それらの記憶は無ではない。それらは間違いなく実在する。つまりそれらは、全体の実在を構成するののもであって、それについては、やはりなお真なる陳述がなされうるものなのである。

もしジュリアス・シーザーが、現在全くの無なのだとすれば、シーザーに関するどのような陳述が、一体より真実なものと言えるのであろうか。無には、全く明確な特性はない。歴史とは、まさに存在したことではなく、単に文書や記録や記念碑によってのみ、未だに生き続けているような事柄に関するものなのか。多くの歴史家は、歴史を、そのような遺物とは考えず、何かそれ以上のものだと見なしている。(私は今その遺物の一つを引き合いにだしているのである。)

時間の構造を考える場合、それにはいくつかの基本となる方法があって、そのなかから我々はどれかを選択する必要がある。我々はよく、なにがしかの実在性が認められるのは、「いま現在、存在している」ものだけであって、既に存在したものには、もう全くなんらの存在もないかのようには語る場合がある。しかし少し考えてみると明らかのように、過去に関する我々の知識がなければ、我々には事実上何も知られないのである。今まさに存在しているものというのは、我々に未だ知る時が持っていないものなのである。音が我々の意識に達するには、少なくとも数秒かかるし、景色でさえ、光速で伝わるにしてもある間隔において知覚されるのである。意識をとま

った知識は、過去のものか、でなければ無である。従って過去を、実在の地位につける候補者の立場から、軽々しく退けないように気を付けるべきであろう！もし過去が、非実在的なものだとすれば、実在とは一体何なのか。

偶然とは思いますが、これまでも僅かといえ、過去の地位について注意を払っていた哲学者はいた。フランスのベルクソン、アメリカのパーズ、アングロ・アメリカのホワイトヘッドである。パーズは巧みに、「過去とは成り終った事実の総体だ」とか「現実的なのは過去である」と述べた。もし我々に影響を及ぼすものが現実存在〈actuality〉なのだとすれば、相対性理論によれば、(少なくともごく微量の量子の影響を別にすれば)作因者から受動者に実質的な効果が及ぶのには、時間がかかるとされている。従って、今現在どこかで起こっていることは、実際にはまだなんら実質的な影響を我々に及ぼしてはいないと言ってよい。

後続の全ての現在において、過去が永遠的なものとしてあるということは、ある程度、記憶と知覚のことを考えれば具体的になる。我々がまさに感じ、考えたことは、一時忘れていたことを意識に呼び戻す回想とは異なる直接的な記憶によって、我々の経験のうちに、なおともかくも存在するものなのである。第一次的な記憶は、それが意識から消えてなくなる前に、ある種の経験を感知している。既に指摘するように、せいぜい光速で現在に伝わるような知覚(少なくとも離れた事物の知覚)が、我々を過去に関係づけているのである。人間の立場からして、過去が現在に浸透するということには、このような意味合いが含まれている。人間が過去をこのような仕方を持つということが、事の全てだとすれば、間違いなく過去は、実在のうちに、厳として限定されている。

神を信じる利点の一つが、この点にあるのは明らかである。我々には、過去は全く部分的に、かすかにしか保存されないにしても、神には、全く完全に、つまり理想的な鮮明さと充満さにおいて、保存されうる。私の幸せな少年時代は、世界と両親とが、神に捧げた贈り物に他ならなかったのである。神は一度手にしたものを失うことはない。従ってもし歴史が真実なら、神のうちにあるという条件で、実際に保存された過去が、歴史を真実なものとなすのである。神は、「全ての事物の」最終的な「尺度」だからである。プロタゴラスには申し訳ないが、人間の思考や認識が、最終的な尺度となるわけではない。私はある六つの理由〈creative synthesis, P. 275ff〉から神の存在を信じているが、そのうちの一つが、歴史の真理がどのようなものであるかを理解可能とさせてくれる。

生命は死をもって終るのか。書物は、最後の文章ないし最後の言葉でもって終る。しかし、それで書物が、単なる沈黙になるわけではないし、また最後の後には、余白しか残らなくなるのでもない。生命という書物は、もっぱらその「言葉」(行動や経験)を示すのであって、それらが、神の生命において完全に保持されるという条件で、不滅な全体を形成するのである。意識ある生命は、意識を永遠に留め、決して無意識になりえない。とは、言うものの(神以外の)諸々の生命は、例えば書物や芸術作品一般のように、有限な存在〈entities〉であって、それらには始まりと終りがある。それゆえにこそ、それらは明確な形式と特殊性とを持ちうるのである。永遠に本来の自分であり続けることを望んで、死後にもさらに経験をなそうとすることは、耐えることのできない単調さを、つまり同じ個性をもった人生の果てしない反復を、求めようとしているのか、それとも神のみ認められる掛け替えのない特権を、つまりいかなる大きく多様な変化や新しさを

通じて自己同一的でありうるような特権を、求めようとしているのかの、いずれかである。無意識のうちに彼らは、いわば完全なる退屈か、神になることかの、いずれかを望んでいるわけである。いわゆる伝統的な人格の不死性に対する私の見方は、以上で尽きている。がしかし、不死性にも十分な意味がなければならぬ。死は、我々が達成してきた実在を破壊するものではない。死は、世界と、神への捧げ物として、実在に最終的な限定と完足した完成を成就するものなのである。(死が、ある場合には破壊になるという点については後で論じる。)

ここでもう一度、「我々を愛する神は我々を滅ぼしはしない」という論議に戻って考えれば、この論議にいくつかの過ちがあるのに気づかれる。一つはそれが過去を非実在的なものと仮定している点である。つまり、死によって「滅ぼされる」のは、死の間際にある人間の存在に限られるわけである。多くの場合、このことには大して重要な損失は伴わないであろう。もし我々が、実際にこの先無限に渡る将来をもった存在であるとすれば、つまりその意味では神のような存在なのだとして、死によって一体何が結果するというのか。確かに何も結果することはないであろう。死は、経験の無限な一連の継起から、この世での有限な僅かの時を奪って、代りに相応の附加を、おそらくより良い場所に定める。我々はある点で無限とし、無限であるという意味では神性に対抗するものとさせるこのような不死性の伝統的な見方は、全く人間に関する合理的な観点を台無しにするものである。

二つ目は、我々がいつどのようにして死ぬかが、神によって定められていると、誤って仮定している点である。勿論これには、その不合理性を既に論じた全能という問題が含まれている。いつどこかで我々が死ぬかということは、たった一つの作因者によって決定される事柄ではなく、我々や他の人々を含む無数の被造物によって、および、それらの全てがある程度は偶然的な仕方相互作用を及ぼし合っているバクテリアや分子、更には身体内にある細胞のような、数え切れないほどの作因者によって、定められる事柄なのである。被造物の存在の細目を決定するのは、いかなる身代わりでもなければ、またいかなる唯一の作因者でもない。人類学の明示するところによれば、人間には、身代りを、つまり責めるべき誰かを、求めるという傾向があると云われる。これが、迷信と言わずして、また実在からの逃避と言わずして、一体何であろうか。

我々が全く死ぬ定めにある動物であるのなら、我々の生命は、空間においてだけでなく時間においても有限だということになる。不死的なもの(過去の実在性)が一連の経験と行為からなる有限な系列に他ならないことは、確かである。死は、我々が死の間際までに享受した生を、些かも減ずるものではない。まだ現実化されないでいる生の可能性を無にしてしまうのが、死である。悲しみの原因はこのことによるのだし、殺人が責められるのも、このためである。我々の生涯が有限であるからこそ、掛け替えのない多くの年月が失われることに、悲劇性が認められるのである。多くの幸運な人々が享受しているような円熟した生涯を送れずに、人生の途上で目的をもって用意されていたそのかなりの部分が全く実現されずに終る人生もある。我々は前と後を見つめる動物であって、現世の将来についてもある程度見つめて生きているのである。偶然にしろ、悪しき意図によってにしろ、ともかくいつなんどき、自らの生涯が終るかもしれないと知ることが、我々の存在に悲劇的な彩りを与えているのである。

選択されるべきものは何か。世界は、時期尚早と見られるいかなる死もないほどに、完全に支配されているとでも言うのか。これには、個々の被造物が完全に支配されているということが当

然のこととして含まれている。現今の過程の形而上学によれば、個体はある程度は自己統制的でなければ、無意味なものだとされる。我々には、人生の終結しえないという意味で、不死的であるような選択肢は選べるのか。ということはつまり、我々の未来は、その点では、神の未来と同様に無限であるという意味である。とすれば、一体なぜ我々は、神のように、空間において偏在することができないのか。我々は、空間的には「有限」だからと言ったも足りないであろう。我々は、全空間の単なる断片にすぎないのである。しかもこのような断片的な被造物が、時間的には無限な未来を持っているというのは、直ちに首肯しえる命題ではない。

次に、愛に満ちた神は、人間という動物の必然性を、結局は意味のないものとしてしまうような自然法則を打ち立てるようなことはしない。という考え方を取り上げてみよう。神は我々を愛しておられる。このことに私は疑いを持ってはいない。だがしかし、神は一体我々をどのようなものとして愛されるのだろうか。これには、次のように答えよう。神は、我々を、死すべき定めを自覚した特有の動物として、つまり空間的にも、その生涯においても有限なものとして、その限りにおいて愛されるということである。我々は各々、この有限性によって個的に限定的されたものとして、神に愛されているのである。そしてまさに、この点において有限であるがために、我々は我々自身と我々の同胞を愛するのである。ここでの私の見方は、ドイツの哲学者ハイデガーとその崇拝者たちと同じである。私は、そのような有限なものとしての自覚から、40年間私の妻を愛してきたのだし、また娘や孫を愛してきたのである。このような人々を愛するのに、超自然的な生き物についてのでたらめな物語を語る必要など、私には全く認められないし、他の多くの人々も同じ思いであろう。また神を愛するのに、全てを凌ぐ愛の形式というような物語の必要性も、私には全く認められない。

勿論、神においては過去が不滅だからと言って、偶然に欲しうるもの全てを、人々に与えるわけではない。(言葉では自分たちを無神論者と言いながらも)漠然と神を意識している被造物は、同時に、現実界では望みの半分も満足させられないような強い欲望をも意識している。我々は、これまで家内や子供たちや友人と楽しい人生を過ごしてきたし、このように人生を楽しめる立場は、尽きることはない。だから、我々は死後にもこのような関係が続くと考えて楽しみうるのである。しかし、人間の条件について些かなりとも知るに及べば、物事が望むようには必ずしもうまく行かないというのが分かるであろう。またこの人生では、悪人が必ずしも一ほとんどかもしれないが一その悪行に相当するだけの罰を受けると限らないし、善人がその善行に相当するだけの褒賞を得ることもない。とはいえ、自由がなければ被造物は存在しないだろうから、被造物に自由があるがために、偶然による相互作用という要素が不可欠となるのである。当然、期待はずれのこととも結果するであろう。しかし自由がなければ悪も善も在りえないにもかかわらず、この一切には、ある不可測な方法で全ての望みが偶然にも満足を得るにいたるような、あるいは少なくとも善行と悪行の全ての所業に相当の賞罰を限なくあたえられるような、超自然的な調整がなくてはならないとする根拠は、全くあるようには思われない。思い切って言わせてもらえば、このような考え方の基本線を示していたのは、フロイトではないだろうか。彼は、既に「世界は決して幼稚園などではない」と述べていたからである。更に言えば、実際全くうまく管理された幼稚園ですらも、なにがしかの不満は残されるのである。

啓示、神からの啓示自体には「誤りはない」、受け取る人間に「誤りがある」。普通の人々が持っている以上に、優れた宗教的洞察力を持っている人々があるように思える。つまりそのような人とは、極端な例を上げれば、普通の人々なら、推測し、手探りし、疑問に思うところを、全くきっぱりと確信に満ちて知っていると言えるような人のことである。彼らが何かを書けば、その言葉には絶対的な真理が宿るのである。またこれとは全く逆の極端な例は、宗教的な事柄においては、誰も他に勝るほど知っている者などおらず、全て同じ様に道に迷っている（でなければ、無神論者と懐疑論者だけが正しいことになる。）とする見方である。これらの両極端の間には、様々な段階がある。一般に、極論は、怪しむべきものとして避けるのが合理的でとある。これまでに神の完全性と不変性をはじめとして、五つの問題を採りあげてきたが、それでは極論を調停して中道を求めるような観点が論じ続けられてきた。そこでもう一度その問題を、中道を目指すという観点から整理することにしたい。

まず第一の問題には、古典的な観念に見られる絶対的で、越えられず、変化しえない神の完全性という概念が、全く疑念を抱かれずに肯定されるという極論があった。もう一方の極論は、いかなる点においても、存在は、厳密には越えられず、変化しえないとする観点を否定するものである。これを調停する中道的観点は、こうである。確かに、越えられないし、不変的でもある神の完全性はある。がしかしその完全性はただ、神性を抽象的な観点において見た場合であって、具体的な観点から見た場合には、それは、自分自身は超えらるが、他のものによっては超えられず、しかも良い方向にのみ変化しうるものなのである。これは、いかなる意味においても、あるいはあらゆる確かな基準に照らしても、超えることのできないような価値という観念には、矛盾か、でなければ全く不明な意味かの、いずれかが認められるということからも支持される。

二つ目の問題には、考えられるかぎりでの最も高級な、創造的かつ支配的な力を肯定するという極論が見られた。すなわち、意志決定を占有でき、世界を構成する個体には些かの決定権も残さず、完全に世界の細部を確定できるという極論である。これとは全く逆の極論は、世界を支配する、ないし創造する力の形式に、このような高級な、ないしは至高な力の形式を、些かも認めないとする立場である。これらを調停する中道の立場は、こうである。世界を創造し、支配する、ある高級な、ないしは至高な、考えられるかぎりの力は存在する。しかしそれには、意志決定を占有するというような不合理性はあってはならないし、到底ありえないことである。むしろそれは、個体自らが意志決定権を持って、自身を創造し、支配する力、つまり最も高級な力によっては確定されずに残されるような、細部を決定するある種の能力でなければならない。要は、最も高級な力というものを、合理的に考えようとすれば、あるいは崇拜するに足るものとするためには、このような力の形式を考える以外にはないということである。

三つ目の問題には、考えるかぎりでの最も高級な、ないし神的な知識という考え方に極論が認められる。つまり出来事を、時間を通じて、正確かつ不変的に捉えるという意味では、全く誤りも無知もないとする極論である。これと逆の極論は、誤りや無知を逃れられるような最も高級な知識の形式など、ありえないとする立場である。これらを調停する立場は、こうである。誤りや無知を免れているような、考えられるかぎりでの最も高級な、ないし神的な知識は存在する。ただし時間のうちにある出来事は、一度きりで完全に定められるような全体を形成することはなく、徐々に現実存在を増し加えながら果てしなく成長しゆくものである。全ての時間を不変的な在り方

で眺めるといのは、誤った見方であり、どうみても考えられるかぎりの最も高級な、ないし神学的な知識の形式とは言えそうにないからである。ソツツイーニ派の人々は、きっぱりと、未だに生起していない未来の出来事は、知られるためにそこに存在するということはないし、それらの出来事を知ると主張するのは、誤り以外なものでもないとして述べていた。神は、我々が明日することを、先取りして、ないし永遠において知るようなことはない。なぜなら、我々が決定するまでは、我々の明日の決定というようなものなど存在しようがないからである。ソツツイーニ派の理論に精通していたフランス人のジュール・ルキエは、この問題を細心に検討した結果、彼らと同じ結論に到達した。ドイツ人のフェヒナーと神学者のプフライデラーもおそらく独立して、同様の結論に至った。イタリア、イングランドおよびアメリカでも、やや遅れてかなりの思想家がこの問題に取り組んだが、やはり同じ結論に達した。

四つ目の問題には、古典的な観点の極論として、神は愛に満ちたものだと言われながらも、他のものに対するいかなる情緒、感情、感受性もなく、しかも被造物との関係では、受動的というより、全く能動的（「純粋現実態」—この言葉には、見かけは明瞭だが実際は不合理な、典型的な定式化を見ることができる。）だとされる見方を挙げることができる。これを最初に述べたのは、アリストテレスであった。彼は言う。神はいかなるものによっても動かされることなく、全てのものを動かすものである。これと逆の極論は、ギリシャ神話に見られる多神論的観点である。その超人間的な存在である神々には、実に様々な情緒が認められる、彼らは、嫉妬深く、短気で、欲情的で、それでいて不死なのである。これを調停する観点は、こうである。神は、無比な完全さで、他の全てのものの感じを感取するという意味では、愛に満ちたものであって低級な情念（ただし相手の立場になって対象化され、共感されるような情念は別にして）からは全く免れている。しかし神は、全く確固として、恒常的に、全てのものに神的な配慮をなされるが、常に一部では新たな経験をもって、被造物の新しさに応答されもする。決して変わらないものとは、被造物の感じを感取する神の完全さである。とはいえ、例えば、貴方や私の存在を欠いている世界への完全な応答が、貴方や私の存在する世界への完全な応答となるようなことはないであろう。結局、このような観点だけが、聖書のメッセージを最も正当に評価できるのであって、これこそが、実際、聖書を全く離れても、神を人間の経験によって考える唯一理に適った整合的な方法なのである。人間の経験は、原理的には人間の本性だけでなく考えられるかぎりでの動物の本性をも、つまり考えるいかなる超動物的な本性をも、越えるものである。ただし、超動物的な本性をもつものと考えられる神は、越えることができない。

以上の四つの問題は、神の本性に、つまり人間という特殊な種に関するものではなく、被造物一般に関するものであった。五つ目と六つ目の問題では、神と人間との関係が問題とされる。

五つ目の問題には、死後にも人間が、ある超自然的な領域で、永遠にその人生を歩み続けられるという極論が見られる。これと逆の極論は、人間は死ねば、単にその生が終るというだけでなく、喜びや悲しみを伴った全生涯が、現実の美や豊かさの全てが、まるで存在などしなかったかのように、まったくの無に帰するという見方である。勿論、これを首尾一貫して主張する者は誰もいない。しかしかなりな人々が、漠然としてはあるがこのような見方を採っているし、相当数の哲学者も似たり寄ったりで、たいしてその知賢に差は見られない。これを調停する観点は、こうである。ある個人の全生涯は、その具体的な価値の全てと共に、その人間の内面の生が持つ情



念の秘密と隠された美を含む神<deity>によって、永遠に所有される。「神に対しては、全ての心が開かれており、隠し通せるようないかなる秘密もありえない」のである。(これは、英国国教会派の祈禱書からの引用だが、それが何世紀もの間、明らかに持ってきたような意味が、神学者たちにほとんど等閑視されているのは不思議なことである。)

ようやく六つ目の、啓示の問題にたどりついた。この問題に関する両極論は明白ではないだろうか。一方は、宗教上の知識には、人間の手で絶対に誤りなく捕らえられるような、特別な源泉があるとするものであり、他方は、そのように信頼し、確信できるに足るようないかなる知識の源泉も存在しないとするものである。ここでは次のことを銘記すべきであろう。科学者は、現在認められている科学の成果を絶対確実なものと主張することがないにもかかわらず、技術者はそれらの多くの成果を確信をもって実践に応用するのである。同様に、仮に宗教上の知識に絶対誤りのない源泉などはないと言っても、これはないかもトム、ディック、スーザン、メアリーのようなありふれた人間が、聖者や歴史上の宗教の創始者と同じ様に助けになりうると言っているわけではない。また貴方が気に入っている書物のどれにでも、聖書や仏教徒の『スートラ』、あるいは『バガヴァッド・ギータ』と同程度の宗教的な知恵ぐらひは認められると言うものでもない。啓示などないということと、絶対確実な、信頼するに足る啓示があるということとの間には、様々な段階が考えられる。

キリスト教の根本主義者たちによって主張される無謬性に関する陳述は、どれもきわめて極端なもののように思われる。それらの主張は、複雑きわまりなく、容易にその真意を掴めないのは確かである。例えばイスラム教では、ひとりの人の神的靈感を絶対に信じる必要があるが、キリスト教では、四人の作者がそれぞれ福音書を記しているものの、私の覚えている限りでは、その誰一人として、無謬性を明白に主張したものはいない。使徒書簡の数人の作者、使徒行伝の作者、旧約聖書の多くの作者も、その点については同じである。全てが、無謬であると思込まれているだけであって、私の知る限り、彼ら自身がそのような無謬性を明白に主張しているわけではない。

それぞれの作者を誤りえないものと見なすとはどういうことか。おそらくそれは、作者たちが(ものを書く場合に)神の力によって、完全に支配されていると見なさざるえないということであろう。完全な支配というこの概念は、二つ目の問題において批判された全能とい概念に他ならない。それは観念とは言えないものだとは私は考えている。ある書物から神について知りうるということと、ある書物から、あるいは他のものから、神が誤りえないものと知りうることは、全く異なった問題である。無謬な神から無謬な書物(無謬な読者)にまでは、途方もない隔りがある。大半の人々にとっては、それは、合理的信仰から盲目的信仰<idolatry>への歩みに終る。人間の手で、人間の言葉で書かれ、人間の頭によって他の言葉に翻訳されたようないかなる書物も、文字通りに、神的な「神の言葉」とはなりえない。我々が知るのは、神に関する人間の言葉にすぎない。人間が神によって神感を与えられるにしても、未だ人間であることに変わりはないのである。

使徒パウロは、書簡の一つに、自分の考えの一切がキリストから出ているわけではないと述べている。ということは、その考えのあるものに誤りがあるということである。一般に、聖書に対して主張される無謬性は、聖書自体に述べられている無謬性よりも強く言われているように思われ

る。

中世のキリスト教神学者たちは、それなりに学者であって、聖書の真理性に対する見方も、根本主義者のなかに見られる見方ほど素朴なものではなかった。単にものが読めるだけの人の解釈する聖書が、最終的な真理とされるのではなく、十分な指導の元に、教区司祭たちによって解釈される聖書が、最終的な真理とされる。そしてそれが、結局ある定められた時に、教会で特別な役割をもったひとりの人間に下されるのである。無謬性に関する『カトリック教の百科辞典』の記事を眼にして思うのだが、そこでの見方には、未だに根拠薄弱なことしかのべられていない。曰く、宗教上の事柄では、人間は明確な導きを必要とする以上、当然神は人間が必要とするものを人間に与えるであろうと。これと逆の論議は、こうである。人間は、自由に考えることのできる特殊な動物であって、そのような動物には、あるがままの、はかなく誤りやすい自身の思考力は無視し切れないし、また直接的にかつ誤りなく、神の知恵を具現することもできない。このような動物に必要とされるのは、科学や哲学において見られるように、方法を学ぶことでしかない。その方法とは、一つは、協力と相互訂正の方法である。これによって、我々は少なくとも真理の近くに迫ることができる。一つは、相互に譲歩し合って、尊敬、妥協、寛大さをお互いに示し合う方法である。これによって、無用な挫折感を抱くことなく、またお互いに傷つけ合うこともなく、相反する目標を和解に至らせることができる。

古典的ないし中世的観点の際立った特徴は、次のような信念のうちに見られた。すなわちその信念とは、ギリシャ哲学では、特別な啓示もなく人間の理性によって、啓示宗教の真理に近づいていたという信念である。従って、教父たちは、聖書を読む際には、ユダヤキリスト教的伝統をいくらか加味しながらも、自分たちが、ギリシャ的思考法の本質的な原理と考えたものを見出そうとしたのである。聖書というテキストも、明らかに制限つきではあるが、彼らが知っていたその唯一の哲学によって、意味が解明されるものと考えられたわけである。特にこれは、関連のあるテキストのなかでも、神を、完全ないし不変的なものとしたテキストについて強く見られる。

英語の聖書には、「完全な」、「完全に」、「完全性」という言葉が数多く見られる。その大半は、神の状態を述べるためにではなく、あるがままの、あるいはあるべき人間の状態を述べるために使われている。人間は、考えるあらゆる点においてというのではなく、倫理的、宗教的な善においては、つまり宗教的な規範に即して誠実に生きているという点では、完全である。肉体的な美、技量、ないし世俗的な知識の完全性は、全く疑われていない。すなわち、ここでは絶対的な価値という包括的な形而上学的意味は、意図されていないということである。神の状態を示すのに、「完全な」ないし「不変的な」という言葉がめったに使われていないのはどうしてか。それらが使われるあらゆる文脈から判断して、それらの言葉には、「全くあらゆる点において変化しえず増しえない」というギリシャ的な形而上学的意味以外のなにかが含意れているように思われる。例えば「主〈jehovah〉なる私は変わることがない」と述べられているマラキ書（第三章六節）では、「完全な」という言葉は見当たらず、主が、イスラエルの民に対して、絶対的に信頼できる不動の善意を持たれていることがはっきりと断言されている。（私に再び帰れ、私はくあなたがたに帰ろうと、万軍の主は言われた）（第三章六節）訳者補足・・・）また「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」（マタイによる福音書

第五章四八節) という一節を見る限り、端的に完全なる神の存在形式と端的に不完全な人間の存在形式との間に、絶対的な相違を認めることは全く困難である。

神は、確かに、全く常に、善意を持っておられるし、誤る可能性もなく、批判を受ける余地もない。一方我々とは言えば、気まぐれにそういう状態になるときもあるが、それにもそれなりの程度がある。ここで大切なことは、それが、変化そのものに関わるのではなく、つまり変化を倫理的に否定する観点はもちろん、中立的ないし肯定的に見る観点にも関わるのものではなく、善から悪(あるいは並)、悪から善への変化にのみ関わっているということである。形而上学的な問題は、未だ立てられてはいないのである。聖書の作者たちは、形而上学者などではなかった。とはいえ、中世の神学者たち、例えば、ギリシャ哲学に浸り切っていたアウグスティヌスは、至る所で形而上学を求めたし、一またそれを見出したとも考えていた。しかし実際は、「不動の動者」(アリストテレス)としての至高ないし神的な実在の概念は、新約聖書や旧約聖書には問題とされなかった概念であった。

「変化の影もない」(ヤコブの手紙第一章十七節)がまずあって、その後、倫理的な問題および、そこから全ての善が生じる一者としての神の問題が続いたのである。従って、神<deity>の善行が問題なのである。繰り返せば、これは、神の一般的な定義づけをなす形而上学ではないということになる。聖書が、哲学的神学に関する論文ではないとした点で、スピノザは正しかった。マラキ書の一節では神の善を傷つけることなく、神に変化があると示唆されてさえいる。というのも、もしイスラエル人が神の命を成就するために戻ってくれば、神もそれに応じて、つまりイスラエル人の変化に全く呼応して、変化するとされるからである。聖書の多くの箇所も、合理的に解釈されれば、このような解釈を受け入れるであろう。

教父たちにとっては、神の知識は、時間のうちにある全ての出来事を、無時間的、永遠的に眺めるものとされる。もっとも我々には、それは、過去であったり未来であったりするものだが。旧約聖書の大半の部分には、全くこれとは違った見方が含まれているように思われるし、おそらく、新約聖書を含む全てにおいても、神が全時間を完全に不変的に見渡せると、明確かつ明白に示唆しているところなどどこにもないであろう。聖書学者のオスカー・クールマンが、この問題を扱っている。新しい有神論は、中世初期ないし盛期において考えられた以上に、聖書の考え方により近づくものなのである。

古典的有神論は、あまりうまく理解されなかったギリシャ哲学とあまり専門的でなかった聖書解釈との、妥協の産物であった。多くの者がそう思っているようだが、全能という概念は、プラトンとアリストテレスによっては主張されてはない(実際は否定されている)し、また聖書にも明白に述べられているわけではない。(人間の生涯が死において終ることを否定する)不死性に関して言えば、プラトンはそれを主張したが、アリストテレスは主張しなかった。更に言えば、この問題に関するプラトン(あるいはソクラテス)の論議は、今日の大多数の哲学者には全く感銘を与えるものとは思われていない、旧約聖書の大部分では、このような見方は、断言されておらず、暗に否定すらされているのである。

啓示に関する古典的な見方は、現代の大多数の科学者、哲学者、作家を納得されるに足るものではない。非キリスト教的、非ユダヤ教的な宗教の主張をより深く知るにつれて、誤りなき聖書という極論な理論の正当性をいかに解釈すればよいのかが、いままで以上に厄介な問題となって

きている。聖書の無謬性を主張することは、民主主義に恐るべき重荷を課することになる。米国の建国の父たちが、全く根本主義クリスト教徒でなかったのは偶然ではない。ジェファーソン、フランクリン、イーサン、アレン、リンカーン等の人々は、神を信じていたのであって、書物や教会の無謬性を信じていたわけではなかった。同じことは、その散文が韻文よりもさらに詩的な偉大な作家であるエマーソンについても言えるし、我が国の偉大な三人の哲学者である、パース、ジェイムズ、ロイスについても言える。宗教が、徐々に、知的には月並な、あるいは平凡な事柄になりさがるのは、望ましいことだろうか。

## 二面的超越性の原理

先に取り上げた誤謬のうち最初の四つは、一連の相対立した二つの概念—有限的—無限的—、時間的—永遠的、相対的—絶対的、偶然—必然的、物的—心的等々—の一方の神を捉えることによって、他の全てのものから神を区別しようとする点で、「一面的な」観点を示すものである。しかしこれは、我々の無限性、永遠性、絶対性、必然性、全き精神性に対する崇拜心を含んでいる点で、一種の盲目的信仰に他ならない。このような一連の概念は、全くの抽象概念である。愛情という単なる特質だけが問題とされる場合には、愛も全くの抽象的な概念となる。真に崇拜するに足るものとは、どのような意味においても無限であり、卓越しており、またどのような意味においても有限であり、卓越しているような、そのような愛である。神は被造物と対比されるが、それは、無限なものが有限なものと対比されるのということではなく、無限でありかつ有限であるもの（この両面において唯一無比に卓越した在り方をしているもの、つまり考えられる限りでの対抗者ないし問題となる批判を超えているもの）が、断片的であるにすぎないが、自己超越的であるという点では、卓越しているような被造物と対比されるということである。神は被造物と対比されるが、それは、端的に絶対的なものが相対的なものと対比されるというのではなく、唯一無比に卓越した在り方をする絶対的かつ相対的なものが、他のものによって超えられるという点を別にすれば、相対的でも絶対的でもないような被造物と対比されるということである。神はまた、全てを超越する在り方において、永遠的かつ時間的である。つまり神だけが生まれ出ることも死に絶えることもないという意味で、永遠なる個性性を持っているのであって、神だけが、全ての過去と来たるべき全ての未来を享受できるのである。神〈He-she〉は、物的かつ心的であるし、神の身体は(次章を参照)、被造物の身体全てを超越、包括している。この被造物の身体と神に対する関係は、細胞と超細胞的な有機体との関係に等しい。神の精神には、全てを超越するような惜しみのない愛を持った心的なものが、くまなく含まれているのである。

一般に考えられているような全能という観念は、二面的超越性とは相容れない概念である。なぜならばそれは、神と被造物を対比させて、神は全く能動的、独立的、絶対的であるとするのに対し、被造物は、全く受動的だとするからである。結局、神は、全てをなすか何もなさないかのいずれかだということになる。もし、神が全てをなすのだとすれば、被造物は何もすることがなくなり、無に等しきものとなろう。神の無比な卓越性とは、他のものと相互に作用し合うということのうちに、つまり他のものとの関係において、能動的かつ受動的である点にある。我々は、自由から結果する無秩序に歯止めを掛ける神から、また宇宙の秩序内において最善な形で場所が

占められるように我々を鼓舞する神から、不可欠な援助を得ながら、我々が自らの存在を自身で決定することによって、神に著しい影響を与えるのである。神は我々を愛する。しかしそれは、我々も自分で、ある程度は自分の存在を引き受ける限りにおいてであって、単に神によって在らしめられるがためではない。恋人が、いくらかは自分も関与したと思われる恋人によって、影響されないと言うことは、全くばかげた話か、さもなければ矛盾したことである。全能という概念は、しばしば、そのような矛盾に帰する方法で考えられてきた。

「二面的超越性」という表現は、私自身の表現である。この根本となる考え方は、ホワイトヘッドにも、他の哲学者にも認められるが、幾つかの点で彼らの定式化には厳密さが欠けている。例えば、保守的なイギリスの神学者たちが、同じ神性に、有限性と無限性とを両方を持たせることは矛盾だと批判する場合、その批判には、基本的な論理上の真理が全く無視されている。つまり、或るものを、Pでありかつ非Pである（この場合Pは、述語ないし属性）と記述することは、その述語とその述語の否定とを「同じ観点」において、或るものに摘要する場合にのみ、矛盾するという基本的な論理上の真理が無視されている。従って、二面的超越性においては、ことような論理上の真理を無視した適用はなされないし、また認められてもいない。もっと言えば、この二面的超越性は、先の二つの観点の相違をいかにすれば明確に説明できるかを示すものなのである。絶対的、無限的な相は抽象的であって、諸々の価値を持つための神の潜在性ないし能力に関係している。一方、有限性ないし相対性は、神の現実態〈actuality〉に関係している。もしあなたや、私が異なった決定をしたとすれば、神は喜んで（あるいは苦しんで）それらの異なった決定を享受したことであろう。現実的でありうるものならどんなものでも、神は神的に所有しうが、現実的に神が所有するものは、ある程度被造物の決定に依存している。これが、存在〈existence〉の社会的構造なのである。愛の至上性とは、どのような存在〈being〉も、単に自分だけの決定においては、つまり全く自分自身の決定に基づいてだけでは、いかなる価値も持てないということに他ならない。

アリストテレスは、抽象的ないし普遍的なものは、具体的、個的なものの中にのみ実在すると述べた。しかし彼は、不変的に思考する不動の動者として定義づけられる神の観念が、いかに抽象的でもっぱら普遍的なだけのもにすぎないかに気づくことができなかつた——一体これで何を思考するというのか。アリストテレスは言う。神の思考とは、ただ思考自体を思考するものである。例えば、あなたや私のような特殊な事物や個体は、知るに値せず、ただ永遠的な本質、普遍的なものだけが、知るに値するというのである。従ってもし我々が、人間の普遍的な本質とあれこれの個々の人間との両方を知るとすれば、我々は、神が知るものだけでなく、さらにそれ以上のものを知るわけである。ギリシャ人の抽象好みと具体軽視とは、このパラドクスに気づきさえすれば、明かとなったはずである。もっとも、一羽の雀でさえ天にいます父にはほっておけないと、福音書〈Matthew.6.25. 訳者注〉に言われていることから、ごく僅かだが神学者のなかにも、個体の価値を軽視しえた者もいたが、キリスト教の神学者たちはほとんど皆無である。しかし一方、その神学者たちは、アリストテレスには明確に分かっていたことが、つまりアリストテレスの考え方とは逆に、かりに神が個々の個体とその生涯とに気づいているとすれば、個によって満たされている実在の全体は、神の知識のうちに包括されざるを得なくなるということが分からなかつた。しかしこの具体的な個からなる全体は、永遠的ではなく、瞬間瞬間に新しい

ものを受け入れるし、また少なくともこれらのうちの或るものは、神ないし被造物あるいはその両方による自由な決定の結果だという意味では、偶然的でもある。従って最早、神をもつばら永遠的かつ必然的とだけ主張することはできないであろう。むしろ時間的、偶然的でもあると言わねばならない。ということは、好む好まざるとにかかわらず、二面的超越性の理論に至る門戸は既に開かれていることになる。

もし我々が、具体的な個々の状況では、環境の変化に応じて当然の如く異なった反応をする人でも、常に(適度に)「親切である」という点で、その人を不変的だと評しても、それは矛盾したことにはならないであろう。この両面の対比の理想化された形式が、神に、つまり親切さという理想に唯一誤りなく沿うことのできる神に、適用されるのである。神は「単純」であるとする伝統的な理論に基づいて、神の本性には、二面的超越性が示唆しているような、実際に異なった相があるという見方を拒否する思想家がいるかもしれない。しかし神は単純だとするこの論議が、二面的超越性に対立するものとして使われる限り、全く論点先取となるであろう。神は、単純であり複雑である。つまり抽象相においては単純で、具体相においては複雑だということである。例えば、神の認識上の無謬性は神の倫理的な無謬性とは、実質的には異なっていない(単純性を示す)。しかし神において実現される美的価値については、それに応える神の美的能力に無謬性は認められない。美的価値は、単なる認識的ないし倫理的とは異なり、ある程度は応えられるものにも、つまり具体的なものにも、依存している。神の知識が持っている絶対的に凌がれ得ない認識上の完全性、すなわち被造物に対する神の意志決定の絶対的な正しさと、神によって享受される現実的な、宇宙の詩(その詩の「各行」は部分的には自らの意志で決定される。)との間には、実質的な相違がある。

ポール・ティリッヒの「神は存在であって、ある一つの存在ではない」、つまり普遍的なものであって、個体ではないという言葉は、二面的超越性に背むいているだけでなく、同時にこのような違背の全てに対してなされる次のような反論に道を開くものである。その反論とは、結局、神を内容のない抽象概念にしてしまうか、それとも神を未開部族の崇拜する呪物に、つまりただ有限で、相対的で、可変的な個体にしてしまうかのいずれかになる、という反論である。我々のなかには、無限性だけを、唯一理に適った神の属性だと考える者がいるが、この無限性は、伝統的な見方が持っている意味のない、矛盾した、つまり内容空疎な単なる無限性などではない。

五つ目と六つ目の誤謬は、唯一無比に高められた神の本性ないし働きに関するものではなく、人間という種の特異な性質ないし状態に関するものであるということからすれば、二面的超越性は、これらの問題には適用されないであろう。ただしこれは、人間という種が、確かに超越的なものでなく、自然内での計り知れない例外でもなく、また神の在り方のように超自然的なものでもないという条件においてである。そしてこれがまさに、伝統的な不死性の見方と新しい不死性の見方との間に見られる問題に他ならない。全ての動物と同じ様に、我々にも生と死にはさまれた有限な生涯がある。しかし不死性の観点では、死後にも無限な人生があるとされる。これは極端な見方であろう。これと全く逆の極端は、死後の我々の人生は、有限どころではなく、全くの無〈zero〉に帰されるとするものである。死体としての我々には、有限にしる無限にしる、とにかく連続したいかなる生きた経験もない。我々は死んでいるのだから意識はない。過去に或ものであったものが、今では何ものでもなくなるという。だがしかし同じ実在が、或るものでもあり、

何ものでもないということなど、果たしてありうることなのだろうか。中道的だが肯定的な不死性の見方は、我々の生きた年月は、今後も変わらずにそのまま在り続けるとする見方であろう。

現在のジュリアス・シーザーとは、一体何なのかを考えてみよう。シーザーが「今生きていない」ということは、シーザーの経験と行為が、今なお我々の現在の世界と我々に影響を与えているという意味であると同時に、我々と我々の世界は、シーザーに全く影響を与えないという意味である。我々が相互に作用し合えるのは、我々と同時代の人である。換言すれば、我々の祖先は、今でも我々に影響を与えているが、我々が祖先に影響を与えることは決してない。過去の諸個体が存在しないという意味は、まさにこのことである。過去の諸個体は今でも実在的である。しかし、同時代に生きる我々のお互いの関係については、二面的であるとはいえ、彼らの我々に対する、実在するものとしての因果的な関係は、一方的でしかない。死も時の経過も全く具体的な実在を破壊することができない。具体的なものは、出来事から、つまり単に人やものからではなく、ある特定の時のうちにある人やものから成っているからである。紀元前一世紀という時代に生きたシーザーは、今後も変わらずにそのまま在り続けるであろう。この価値は、神を信じる者によってのみ、十分に評価されうる。神にとっては、一秒前が我々にとってあるのと同じ様に、いやそれ以上に生き生きと、過去の全てが享受されるからである。

啓示の問題にもまた、中間的な真理と同時に、二つの極端な一面的観点が含まれている。誤ることのない神が、誤りやすい人間と意志伝達を計られる。意志を伝える側には、誤りなどありえないが、意志を受ける側には誤りがありうる。結局、神託が受け取られるものである限りは、神に関する絶対的な真理が所有されるということもなければ、またそのような真理が全く所有されないということもない。神託は、誤りやすく、示唆に富み、曖昧であるが、それでも紛れもなく多少とも明確な真理を持っている。神託とは、神が何であるかを、無力な人間が不確かながらも部分的に知る手助けとなるものである。神が神を知るように、神を確実かつ判明に知るということは、神の特権であって、人間の特権ではない。もう人間以上のものであるかのような振りはやめることにしよう。

人間を他の動物と比較した場合、その相違点は、人間には無限な生があり、動物には有限な生しかないという点であるのでもないし、また人間には神の絶対的な知識があるが、動物には些かも神の知識は認められないという点にあるのでもない。それは、我々人間だけが、自分の有限性を意識的に理解しているという点に、また我々だけが、現在の自分と一年前の自分を明確に区別でき、かつその二つの自己を部分的には同じものだと思われたいという点に、また我々だけが、自分の人生を明確に計画でき、それを（いかに不十分とはいえ）人間という種の道程と神に関係づけることができるという点にある。換言すれば、我々だけが、この人生のなかで、たとえどれほど美しく生きた人生であっても、生きた限りでの人生は、神には、それがそのまま、死後も永遠に生き生きと実在するということを、意識できるのである。神についての明確な思想が持てるだけでなく、それらの思想が、少なくとも部分的には神についての真理に接近していると合理的に信じられるのは、我々だけである。他の動物に対する我々の優越性は、絶対的なものではなく（他を絶対的に卓越しているのは、神だけである）、計り知れないほどに相対的な優越性にある。例えばそれは、これまでに人間自身が織り成してきた数限りない詩の量と、全くそのような詩を織り成すことがなかった（極端に緩く解釈されない限り、織り成しているとは言われないであ

う) 他の動物との間に見られる途方もない隔たりを考えればよい。あるいは(何千年, 何万年, 何百万年という計り知れないほどの年月の間に) 人間が生み出してきた数限りのない音楽と, 歌うと言われている(手なが猿, ザトウクジラおよび他の一部の) わずかの鳥類や哺乳動物の作り出す極めて単純な音との間に見られる隔たりを考えてもよいだろう。まして, 昆虫, 蛙, ひき蛙, トカゲの一部にかろうじて見られる鳴き声との開きは言う間でもない。冷静に見れば, 我々の優越性は充分明らかなことであって, なにもその優越性を持ちあげるために作り話に頼る必要はない。自分たちの回りの世界について持つことのできるチンパンジーの知識と, 何百万光年の宇宙を眺め, ビッグバン理論に至りついた我々の科学上の知識との間に見られる途方もない隔りを思ってみよ。それにしても, この人生において, 我々自身について知っていること以上の卓越さを主張するには, なんとかぬぼれを強くする必要があることか。

超自然的なものは実在する。がしかし超自然的なものは神であって, 人類ではない。空間において限られず, また生まれも死にもしない神という超自然的な実在のうちに, 我々人間の限られた断片的な実在は, 滅びることなく永遠に包括されている。我々は, 全てを包み込む〈生命〉のなかに在る一定の量子, すなわちその〈生命〉のなかで「我々が生き, 動き, 存在する」(使徒行伝, 17, 28) ような一定の量子なのである。

(1990年 9 月30日受理)